

浄土

十一月號

目次

なぜ人間は苦しむか……………佐藤賢順(2)

石田一鼎 餞別狀(二)……………吉田絃二郎(13)

神主の話……………高柳光壽(5)

愛別……………ふじた・ひろし(8)

紹介 浄土宗教學院研究所……………(12)
佛教學生聯盟……………(8)

「赤い羽根」・後日譚……………大室了皓(10)

芝園だより……………(16)

なぜ人間は苦しむか

佐藤賢順

苦しみは世界の根本的な性格の一つであります。凡そ世界のうちに生きるもので快樂を経験しないものがないと同じく、苦悶を知らないものはありません。動物も人も共に苦しみもだえるのであります。恐らく動物も、想像する以上の苦しみを経験するのであります。しかし苦しみを意識的に取り上げて、これから離脱しようと努力するのは人間だけであります。では人間の苦悶は如何にして生れるでしょうか、また苦悶とはどのような性質のものでしょうか。

教養ある青年達の集りで座談をしたとき、話がたまたま人生の苦しみという話題に及んだので、私は青年達に尋ねてみました。「諸君は切實に苦しみというものを感ずることがありますか、どういう氣持を苦しみと感じますか」と尋ねました。今の青年が苦悶に對して、どのように鋭い感覺を持つてゐるだろうか、罪惡についての自覺などは、大分以前と變つてきてゐるようであるが、苦しみについてはどうであらうか、それを知りたいと思つたのであります。

A君はまず次のように答へました。「私は生れつき樂觀的な性質で、すべて世の中のこととは、美しく楽しく營まれてゐると考える方なので、別に取り立てて苦しみというほどの事を感じたことはありません。萬事が自分の思うようにならなければならぬで、それでよし、不満もないのです。身體的な苦しみ、病氣のときの苦しみ——これは苦悶でなく、むしろ苦痛というのでしようが、苦しみといへばそれを感じる位のものです」というのでした。

またB君は次のように言いました。「僕はそうではありませんね。身體的な苦痛の外に、精神的な苦痛を大いに感じますよ。それは物事が自分の思うようにならないときです。特に、自分のやつてゐる事業の上で、同僚や先輩と意見が合わず、自分の考えと違つた事をしなければならぬときです。これが最も苦しい時です」と語りました。

するとC君は「それはみな苦しみには違いないけれども、もつと外の苦しみがありはしないですか。僕の感ずるのは、宇宙に對する苦しみ——という大げさに聞えるが、世界のうちに生きていることの漠然とした苦しみですね。自分の生命を奥底からゆるがすような不安です。」と答えるのでした。

またD君はこう言いました「自分の期待が裏切られること、願望が満たされないこと、これが凡て苦しみとして感じられるのではないのですか」

これらの言葉はどれもみな苦しみということの本質に觸れています。佛教で苦しみを分析するとき、三苦とか四苦とか八苦とか十苦とか十六苦とか、色々細かに概念的に分けて、苦しみを説明する仕方がありますが、今の青年達の考え方が期せずして、このように分析された苦の概念のどれかに當つていることも興味のあることです。三苦や四苦の中には、身體的な苦しみも精神的な苦しみも共に含まれています。例えば四苦というのは生老病死の四つであつて、これは身體的と精神的との兩方面の苦しみを併せています。とに角苦しみはいろいろに分析されますが、身體的なものよりは精神的なものの方が、一層根本的であることは言うまでもなく、更に、苦しみということの根柢には、廣く生の要求に對する不滿が横たわつていることに氣がつくのであります。生は満ち足りていよいよ榮えゆくことを願ひ、常に變らざることを望むのであります。が、現實は決してそうはなりません。絶えず現れ來たり、また消え去り、刻々にうつろひゆき、暫くも止まるものがないというのが實相であります。もともと人間の本能は、いかなる事柄についても、すべてそれが常住であり、不變である、と思いたがる性質を持つていて、ここから牢固として抜くことのできない迷執、執着が生れてくるのです。本能の奥深く根を張つてゐるこの執着は、常にその矛盾に遭遇します。かくありたい、こうあつてほしい、という生の本來の願望は常に裏切られて、その矛盾にぶつかかるのです。年老いて衰えゆくこと、病み患ふこと、死ぬことは、常に變らず榮えることを願ふ本能にとつては、堪えがたき苦痛であるに相違ありません。さきほど擧げた三苦の分類のうちに行苦というのがあります。これこそその苦しみであります。

この行苦(行苦の行は諸行無常の行で、移り變る意味ですが)、すなわちうつろひゆくことの苦しみ、凡てが變化してゆくことの苦しみが、最も根本的であり、凡ての苦しみを貫いてゐることであります。こう考えてきますと、ほんとうに深い苦悶というものは、生きていることそのことのうちにある苦しみであ

り、人間をその根柢からゆるがせているいらだたしさである、と言つてよいでしょう。

ところで、私は初めに、人間は自らの苦しみを意識的に取り上げてこれを対象とすることができると申しました。生における矛盾が次第に大きくなつてくると、老病死の如く、それは意識的に対象とされます。そして人間はそれと對決してそれと闘い、それを克服しなければならなくなるのです。もともと苦悶を意識的に対象としてこれを見つめる、などということは望ましいことではありません。ですから、なるべくこうしたことには觸れないようにするのです。しかし一度これと對決した以上は、必ずこれを克服して、より高い水準に超え出でなければなりません。

この苦悶を克服する道はいろいろありますが、何よりも現實超越の道が選ばれなければなりません。厭離穢土、欣求淨土、この穢れた世を厭い捨てて、淨土を欣い求めるといふのはこの現實的な生を、罪と苦しみに覆われたものとして見極めて、それを否定し超越することでありす。ですから、こういう生き方は人間自らを反省することにおいても、その深い罪惡と底知れない無智とを見極めて、人間のはかなさに徹し、人間の力の弱さに徹するのであります。善導大師が人間は「曠劫よりこの方、常に没し常に流轉して出離の縁なきもの」であると言つたのもこうした人間觀に徹したのでありますし、法然上人が自己を反省し自らを「五逆十惡の法然房、無智の法然房」として自覺したのも、こうした宗教的人間の自覺に達したのであります。人間にはこうした宿命的な無智があるために、うつろい易い現實を常に變らざるものと執着するのであつて、人間の根源的な苦悶は、この人間の無智から來ているのであります。ですから、人間にはもともと苦悶を克服する力はないのであります。

さてこうして人間の弱さ、はかなさを見極めてその眞實の姿に目ざめることは、言いかえれば、人間を見限ることでありすが、この人間否定の暗黒に落ち込んだそこに、佛の救済の光はさしそめるのであります。丁度、さきほどお話しした苦しみを自覺することが救済への跳躍板であつたのと同じように、罪惡生死の凡夫としての人間の姿をしつかりと把えるとき、逆に、佛の姿は高く大きく仰がれるのであります。古い濁つた水が一ぱい入つている瓶には、新しい清らかな水を注ぐことはできません。新しい水を注ぐのには古い水を捨てなければなりません。自己を空しくして佛の救いの力に隨順すればするほど、佛の力はいよいよ強く働きかけ、佛の姿はますます大きく仰がれるのであります。(十一月二十一日、NHK放送原稿)



神主の話

高柳光壽

近頃栃木縣からある神主が上京しての話である。村の有力者が訪ねて来て、今度新制中學を建てるので應分の寄附をしてくれとのこと、神主は勿論快諾した。それは村の有力者達がそれ／＼寄附をする。その釣合で神主も寄附するものと解釋してゐた。ところが有力者等の方では神社の境内にある立木を伐つてそれで學校を立てよう、それを寄附してくれといふのであつた。神主の方では最近農地解放や農民達の神社への無關心から、神社の將來に關する心配が大きくなつてゐる。それに荒れて來た箇所も修繕も出來ないでゐる。立木を村へやつてしまつたのでは神社が立ち行かないといふので、それを承諾しない。村では神社は氏子のものだ。境内地は國有だ。學校を造るのは村のためだ。それが民主的だといふ。しかし神主は神社は氏子のものではなく、氏子が神社のものだといひ切り得ない。また境内は國有地には相違ないが、もともと神社のものだ。だから今度も無償拂下げになるのだともいひ得ない。ひたすら神社が困るからとのみいふ。すると村では神社には困らせぬといひ返す。この頃の信仰状態ではそれは當てにならぬといふ。いや信仰心は決して神主に劣るものではないと主張する。困つたものだとのことであつた。

宗教家は民衆を精神的な面に於いて救ふ。その代りに民衆は物質的な面で宗教家を援ける。これが普通である。この神主の話はそれとは全くあべこべである。

神社にしても寺院にしても不當な財産や權利は持つべきでない。中世に於ける莫大なる神領や寺領はそのよき例である。神社や寺院がその領地に於ける司法警察權を掌握し、課税を行ふといふことは、何といつても宗教本來の面目ではない。だからこそ所領の縮小削減といふことが、歴史の發展に伴ふ必然的な事實として行はれて來たのである。神社や寺



院が信徒や檀家の寄附を受けるのは當然である。しかしながらそれは社會の發達を阻止するものであつては決してならない。今度の農地解放にしても、地主、その中には神社も寺院も含まれるが、その地主等が廣大な土地を所有してゐることが、小作達の生活を脅かし、また彼等の土地への愛着を薄らげ、更にそれが生産の増加を妨げてゐたことは否定することが出来ない。

農地解放は宗教家にとつて喜ぶべきことでこそあれ、決して悲しむべきことではない。けれどもそれが一時暗い影を投げたことは事實である。これに較べれば境内地拂下げの問題は、それほどでもなかつた。神社や寺院の境内が國有であるといふことが一體どうかしてゐる。明治政府がそれを國有にした時に宗教家は反對すべきであつた。朱印地は國家からその領有權を與へられてゐたもの、いや一時預けられてゐたものだから、それを國家へ返すのは當然であるが、境内地は最初から神社や寺院の所有地で、決して國家の所有地ではなかつたのである。

それはともかくとして、この農地解放と境内拂下げの二つの事柄は、將來のわが國の宗教の在り方について大きな示唆を持つものといはなければならぬ。

私の祖父は神主であつた。彼はその奉仕する神社を自分のものと思つてゐた。祭神に仕へることは頗る敬虔であり、掃除なども他人まかせにはせず、それを重要な目課として決して怠らなかつた。けれども玉垣などは、私の子供の頃には石ではなく木で、それが所々朽ちて破れてゐた。それを自分で修繕らしいことをするが、根本的な修繕、すなはち改築などはしようとはしなかつた。それには金がかかるし、それは必然的に氏子の厄介にならなければならず、それが彼には甚だしく嫌ひであつたからである。

この祖父が死んで叔父が後を繼いだ。彼の代になると、玉垣は直ぐに御影石の立派なものとなつた。水屋も近隣に類を見ない立派なものが出来た。鳥居も新しくなつた。燈籠も數を増した。境内を廣げた。村社から郷社になつた。そして彼自身の装束も祖父のそれと



は比較にならぬ程立派になつた。けれどもこれらは皆氏子からの寄附によつたものであるし、中には私の財産を私には無斷で神社へ寄附したこともあつた。このやうな彼は、しかながら祖父ほどの信仰は持つてゐなかつた。毎日の祭事は祖父のやうに熱心ではなかつたし、掃除も他人まかせのことが多かつた。そして神主としての氏子の信頼は遠く祖父に及ばなかつた。

私は祖父と叔父と二ツの宗教家の型を示したまでであるが、叔父によつて立派になつた神社も、今度の戦火で一物も残さず焼け失せてしまつたことを附け加へて置きたい。私は少年であつたが、この叔父のいつたことを覚えてゐる。それはこれから世の中はだん／＼開けて来るが、さうすると御札が賣れなくなるだらうといふことであつた。ところがその後叔父の子供、それは叔父の跡を嗣いで神主となつた私の従弟であるが、彼のいふには、この叔父の言葉は全く杞憂で、御札の賣行きは年々多くなつて來たとのことであつた。

文化の進むに連れて宗教心が減退して行くと思ふのは明に誤りである。勿論宗教に無關心なもの、反宗教的な人々、それらが増加して行くことは事實である。それは人口増加による必然の結果に過ぎない。けれども人口の増加はこれらの人々を多くして行くと同時に宗教への關心を持つもの、厚き信仰家をも増して行くことも事實である。昔時といへども宗教に無關心な人々がゐなかつたといふのでは決してない。然しながら將來の宗教へ關心を持つ人々が、昔時のそれらの人々と同じやうな信仰の在り方だと思つたら、それは大へんな誤りといへよう。特に宗教家に對する期待は全く異なるものがあるといふべきである。

けれども經濟が宗教活動と切つても切れぬ關係にあることは言を要しない。昔からいかに多くの寺院がこのために改宗をしたかは、今日想像の外にあるといつてよい。最近房州の清澄寺は眞言宗から日蓮宗へ變らうともがいてゐるといふ。それらは單なる住職の信仰の變化によるものとはいひ得ない。領主の外護の下にあつた宗教家はこの點安穩であつたが、同時に無爲でもあつた。外護の下になかつた宗祖のやうな活動が、これからの宗教家には要求せられるであらう。(昭和廿三、十一、十八)

隨想 愛 別

ふぢた・ひろし

悲しみの中において、愛するものとの別れほどふかく切ないものはない。別れの中で、死の別れほどふかく切ないものはない。

「私には、この子がこのまゝ死んでしまうなど、とても堪えられませんか。どのようなことでも私はいたします。お教え下さい。私のこの悲しみを、この苦しみを救つて下さい。この子を蘇らせて下さい。」

あるとき、氣狂いのようになつて死兒を抱いた一人の女が釋尊の前に身を投げて泣いた。しづかな、ふかい瞑想の中からさとすように、釋尊は教えた。

「それでは芥子粒を買つておいで。それも昔から死んだ者を出したことのない家でもらつて來なさい。そおすれば、この子の生命を再び呼び戻す薬をつくつて上げよう」喜んだ女は、死兒をひと抱いたまゝ、それでも一抹の望みえの光を胸に、家から家へ街から街へ、教えられた芥子粒を求めて歩いた。だが、何處へ行つたら、死者を出したことない家が、死の悲しみをもたなかつたものがあつただろうか。釋尊の教えたような芥子粒は、どこを尋ねてもこれを求めることは出来なかつた。足は疲れて來た。夕暮があたりを包んで來た。再び女は絶望に陥りそうになつた。疲勞と失望にたえかねて、うすれゆく夕陽の街に佇んで、女は

あゝ、どおしてもこの兒は、と、切ない想いに頬をぬらした。

しかしそのとき、ひととかけ抱いた死兒のつめたさのその深みをとおして、一筋のあるひらめきが、涙にあふれる胸に、サツとよぎるのを女は感じた。身體の中から一瞬、いままでたゞはりつめていた力が抜けたように、女は地にくづおれて、さめざめと泣いた。その涙は胸の子にそゞろ涙だけではなかつた。人の世において、愛するものとの別れ、死のかなしきをもたないものはないとゆう、その大いなる悲しみにそゞろ涙であつた。女の心は人生の眞實に初めてふれたのであつた。釋尊の教團に入つて、比丘尼となつたこの女、この女の姿に私たちはまたそれぞれ教えられる。

生は苦である。老いるも苦であり、病むこともまた苦である。まして死はより大いなる苦である。しかしこれらの苦惱は、どのような幸福な星の下に生れたものであつても免れ

報告 福井震災と佛教學生連盟

敗戦混迷の中に早くも生産復興の活況を示して來た羽二重の福井地方が、大震災によつて受けた打撃は大きい。しかしそれにも堪えていま再び立ち上ろうとするひたむきの努力が營々とつゞけられている。

記者は月初、同地方への旅になまなましい傷痕と再起の活力とを目にすると共に、あの震災の直後、多くの救援作業の中に若い佛教學生の純粹な汗の一滴のあつたことを聞いた。それは全國佛教學生連盟の諸君の活動である。同連盟は、大正、駒澤、立正、龍谷、大谷などの佛教及び他の官公私立大學、高專に於ける佛教青年會の諸君から成る。その若々しい知識人としての、しかも佛教的情熱にもえる活動は今後全ての面に期待したい。

震災に關することはそれだけでは、もはやニュースではないであろう。しかしその間に示された若い眞摯な姿はいつも新しい。全佛學連を紹介する意味で當時の手記を摘録する

七月十三日。福井市から蘆原へ。うなり狂ひし地鳴の跡福井市は、早くも復興の歩を進めて次々と運び込まれる救援の人と物資であわたしい。灰燼の中に新らしく點在するバラックの間を一行は北陸道に沿つて龜割の平野を左右に北上すること約五里、今はその面影すら止めぬかつての福井縣唯一の仙境湯泉町蘆原に到着した。

七月十四十五日 井江葭村。早朝、シャベル、鍬をかついで地割れの田舎道を行くこと

ることは出来ない。この苦の眞實を見極めることから、佛教は出發する。

○

天正十八年二月十八日に、小田原の御陣 堀尾金助と申す十八になりたる子をたたせて、ふためとも見ざるかなしさのあまりに、いまこの橋をかける事、ははの身には落涙ともなり、そくしん成佛し給へ、いつがんせいしゆんと、後の世の又のちまで、このかきつけを見る人、念佛申たまへや、三十三年のくやう也

尾張の熱田にかゝる截斷橋の欄干の擬寶珠に記しつけられたこの銘文は、それが三百年の古さにあつても、そこにふかく刻みこまれた母の悲念は、いまもなおこの世における母のおもいに通じる新しさ、切實さを語つてゐる。

十八歳の一子を小田原の戦陣に送りだして、そのまゝに、再びはこれの世に相會ふことのできなくなつた別れの悲しみの中に、この母が求め得た一筋の道は何であつたらうか。卅三年の月日が流れた。年月の流れが悲しみの記憶、苦しみの傷痕を、しづかに洗つてゆくとはかりはいえない。なお、母の身には落涙の生である。しかしこの母は、その切な想いの中にこそ、人生をみた。亡き愛子えの供養は、世の人えの回向となつてふりむけられた。道ゆく人のために、橋を架けようとした母のこの心に教えられるものは大きい。この小さな身體の中に、うづく苦惱を、悲傷を轉じて、世のために、與えられた生存を捧げてゆこうと思ひいたつたこの母は、何にそれを教えられたのであろうか。橋の銘文がそのまゝに語るように、佛教であり、念佛の教である。死になやみ、別れにかなしむものゝ眞實に生きる一筋の道がこゝにある。

中村辨康著 法然上人とその信仰

——正月施本に好適——

菊半截八十頁
定價三十圓
送料五圓

中村氏畢生の信仰的名著

民主的宗教の精華、法然教學を餘すところなく現代的に説明したる信仰者、布道家、必携の書。再版の殘部も僅少となりましたから成べく早く御申込み下さい。

東京都港郡芝公園五ノ十
發行所 法然上人鑽仰會

振替東京八二一八七番

十數分、蘆原町の一字井江菰村に入る。三十戸位の農業を主とする此の村落に取つて田の手入れ時の震災は實に名狀し難き慘狀である。倒壊した住家は手のほどこし様もなく、部落を流れる小川は、壁土、瓦、石垣の崩れ横たわる柱で全く流水を斷たれドブ川と化し大木は根こそぎとなり地割れの道に轉げ歩行すら困難をきわめてゐる。

しかし正午頃までには全長三丁餘りの道路の一部が整えられて車が通る程度になし得たが作業の困難さに豫定通りには容易に進まない。眞夏の午過ぎともなれば炎天肌を刺す、それでも次第に路面は修理され、夕刻頃までには部落の中程まで進入することが出来た。

十五日 引續き早朝から作業。學生の出勤に刺戟されたか村人全員の姿が學生に混ざつて眼に映る。どうやら此の村も本覺的に復興の兆が見出されて來た。震災當日野良仕事の爲、大人の犠牲者は無かつた様子だが留守の幼兒の壓死が少くない、満身の力を兩手に埋れ石を持上げた手にひるが吸ひついてゐる。生傷が一つ二つと増して行く。午後の四時頃までには小川も久方ぶりに流れはじめた、人も車も通れる様になつた。更に宿舎に戻るまでのひと時、二面村の道路修理及路上の障礙物の取片づけに渾身の力をふるう。遠く近く餘震の無氣味なうなりが全身をぬけて行く。

十六、七日 蘆原町内の作業。木葉微塵の家屋、ゆり落された白壁、屋根瓦、倒された電柱、アスファルトの路上は凹凸の小山をなしてゐる。斷水によつて飲料水にも事缺水

「赤い羽根」後日譚

大室了 皓

道行く人の胸に赤い羽根がやさしくゆれる。

つめたい暗い人々の心に一つ一つ愛の灯が
ついて行く。

「興えよ取れよ」とかつてオランダの一牧師
が始めたと云う救済運動は、病める者老いた
る者貧しき者、これらのひとびとを救わんと
した、あのたおやかな美しい愛の羽根となつ
て、私達の上に舞つて來たのであります。

人の流れの中に立つて聲をからして呼びか
ける少年少女の可憐な姿を皆様は幾度びか御
覧になつたこととせう。

今日は興える人ではあるが、明日は興えら
れる人となるかも知れない。而し計り知れぬ
世の中にあつても、とにかく興えうる人は幸
福であるといわなければなりません。

皆様の胸にもこれらの少々な募金者の手に
よつて愛の赤い羽根がとめられたことと思ひ
ます。

私は去る十月二十五、六日、愛宕中學校の
一員として、これらの少さい人達と共に、京
橋銀座の街角に立つて、この運動に参加致し
ました。その時に感じた事共をお話ししよう

と思います。

私と共に出かけた生徒は全部で二十四名で
した。これを五ツの班に分けて、四ツの班は
京橋をはさんで、橋のたもとと十字路銀行商店
の角等適當な間隔を置いて立ち、他の一ヶ班
は銀座から京橋にかけて、別に場所を定めず
に歩きながらするいわば移動班といつたふう
にしてみました。そして募金運動をする傍ら
特に各班の中に統計係をきめて統計を作つて
もらいました。而しながら少くとも一秒間に
一人平均に通る人達を数えると云う事は、少
年達にとつて並大ていの事ではありませんで
したが、それでも一生懸命にやつてくれまし
た。その結果をここに御披露してみますと、
次の如くになつたのであります。

先ず、定位置に止つた班と、位置を定めな
かつた班の金額を比較して見ますと、前者は
各班平均五一七圓、後者は一六〇圓でありま
した、これによつて見れば定位置にあつた方
が、募金の成績が非常に良いと云う事が解つ
たのであります。

次の表は、生徒達が非常に苦心をして作成
した男女別統計であります。

桶を前後に町はずれの井戸へ此の道を通ふ女
子供の姿が次々と通りぬけて行く。此の町で
家屋の取壊し片づけ、屋根瓦おろしがはじめ
られた。横に一列に並んだ學生の手を次から
次へと瓦は運ばれてゆく。半壊の家が時折り
ギシ／＼と音をたてる。消毒班は粉末の D D
T に依り假り宿の人家を消毒して行く。つか
液體消毒の噴霧器を握つた學生の作業衣がす
り油に染まつてゐる。學生さん此處も願ひ
します。」と老婆の示す炊事場に噴霧器がむ
けられ、一瞬に蠅と蚊が土間にたゞき落され
る。消毒班は行く。八幡様の境内はところ狭
しとばかり家財道具が持出されその側で救援
の馬鈴薯が配給されてゐる。照りつける太陽
に集つて來る人々の姿は空襲直後の東京の街
の光景を想起させる。町角に背に汗を流しな
がら二、三の學友が「福井縣速報板」を建
てゐる。やがて震災の町にも落日が迫るこ
ろ、昨日まで暗闇の世界であつた此の町にも
街燈がともされた。

十八日 今日も早朝から灼熱の太陽が全身
を焼く目抜き通りの路上整理汚物の取片づ
け、たれ下がつて地に落ちた電線を引く手も
「豆」が赤くはれ上つてゐる。正午で作業道具
を片づけ晝食後學生の手により町役場の玄関
前に祭壇を設け殉難諸靈の供養法要を行う、
寺尾町長、警察署長、町の有志、一般參詣者
之らの人々の中に混ざつて一きは目立つたの
は八十七名の犠牲者の家族の涙の參集であつ
た。限りなき悲哀に驅られて讀經の聲が遠く
消えて行く。

日時		場所		天候	
昭和三、四、五 午後一時—三時		京橋 銀座		晴	
通行人		協力者		割合(通行人との)	
計	人 数	計	人 数	計	人 数
二七、二四〇	男 二一、四八八 女 五、七六〇	一五八	男 一一四 女 四四	〇、五%	〇、八%
	七九%	計		〇、六%	

協力者というのは寄附して下れた人の事です。が今まで私共、少くとも私共は男の方が、こうゆうことには積極的に協力してくれるものと、漠然と感じてゐましたが、實際の統計によつて見ますと、反對に女の方が〇・三%男よりも多い事となります。それにしても通行人の〇・六パーセントしか協力してくれなかつたといふことはいささか淋しい氣がしました。

これだけの統計を以て確定的な事を云々するのは、大きな誤りを犯す原因となるかも知れませんが、とに角、これだけの事實を土臺にしてみても、色々と考えさせられるものがある

るよりに思います。

即ち女性の方が男性よりも多いとするなら(これは時間的關係もあるでしょうが)ば、我々の目標を女性の方に向けた方が良い事になるのであります。即ち午後三時頃までは女性の多く通行する處、デパート・マーケットの附近劇場、映畫館街が良いと云ふことになるわけです。

次にこれは表には明確にあらわれていませんが職業別を考えて見ると、勤め人が最も多く、労働者がそれに次ぎ、金持風の者が一番少くなつています。これは實に不思議な現象ではありませんか、持てる者は少し位與えたとして、考えますが、實際は、仲々そうではないことが解りました。そこで朝夕のラッシュ・アワーの場合だつたら驛の附近、銀行、會社の多い地域が効果的のようです。

結局、我々は女性が多くて、而も勤め人の多くが通行する處をねらえば効果を上げると云ふことになります。

それからこの表によりますと、協力者は僅かに〇・六%であります、二萬一千四百八十八人の内、一五八人しか入れてくれないのです。今日は誰も入れてくれません、「こゝはきつと場所が悪いのですよ、他の處へ行つて

も良いですか」と失望の餘り私の顔を見上げて子供達がいいましたが、どんな處でも相當の人通りがあるならば、そこに頑張つていた方が良いでしょう。このことは移動班の成績が非常によくなかつたとゆうことから推察することが出来ます。ですからこれには相當の忍耐力を必要と致します。

最後に募金中の態度について考えてみますと大きな聲で多數の者が聲を合せて呼びかけた班と、個々別々に小さい聲を出した班とでは、大分入り方が違つていました。やはりうるさいようでも、高らかに叫んだ方が良いのではないでせうか。實際その方が自分達の存在が明らかになつて通行人の方でも「一つ入れようかな」と云う氣になるのではないかと思います。

要するに、問題は道行く人々の心を如何にして、動かすかと云ふことなのであります、従つてどんな處でもとにかく「眞剣な態度」と云ふことが最も必要となつて参ります。同じく、お願い致しますと云うのでも、ほんとうの心から出た言葉でなければ、他人の心を動かす事は出来ないであります。現に私自身も實に眞面目な眞剣な募金者の餘りにも立派な態度に思はず心が動かされてその箱の中にいくらか入れたことがありました。こう云う態度こそ何にも増して重要なものだとしみじみ知つたのであります。

紹介 淨土宗教學院研究所

信仰そのものは純一無雜のものといえ、徒らに夢幻的快悦の殻にのみこもつていたのでわ、現實の社會に生きることが出来ない。矢張り一貫した理論的體系をそなえ、論理的な装いをつけなければ、古きものとして捨て去られてしまう。淨土宗教學院研究所は、千古不變の念佛信仰を現代に生かさしめることを主な役目として、昭和十九年の秋、生まれたものである。そしてその趣旨に沿うべく、設立以來滿四年の歳月を閲し、その間數多貴重成果を積んで來た。

研究會 東京と京都とに、それぞれ大正大學、佛教專門學校の學人を中心とし、弘く教學に關心を抱く人々を集め、毎月一回の研究會を、空襲のさなかといえど斷絶することなく開いて來、今日では第五十一回に達した。

研究補助 有爲篤學の人々の勉學の道を助けるために、研究生制度を設けて、既に十數人の人々の研究業績の完成を見た。

宗學大會 終戰後、學界教界の未だ混とんとしてゐるにさきがけて、昭和二十一年秋京都に於いて第一回の宗學大會を開き、數百の

學人の參集を見、その成果は「佛教論叢」第一集として、既に世人の注視を浴びている。又、昨年秋、東京にて第二回を開いた。他宗門ではやつと最近に至つて之を行ふに至つた。

紀要發刊 大會紀要として「佛教論叢」第一集を、多大の困難を排して昨秋發刊し、今またその第二集を出さんとしている。

◎左に最近の研究會について報告する

第四八回（九月十八日）

宗祖に於ける「宗の觀念」 眞野正順

第四九回（十月三十日）

涅槃經の佛性 佐藤密雄

第五〇回（十一月二七日）

宗祖における「死」 若林隆光

第五一回（十二月十一日）

宗教發生論の構格 中村康隆

特別増大號 いよいよ再生の面目を發揮！

敎界の重鎮を網羅して新年のスタートを切る

本誌をよまずして現代佛教を語ることに勿れ！

淨年新 土號

内容

現代信仰の動向……………文學博士 鈴木大拙
新時代の佛教……………文學博士 宇野圓空
淨土信仰の眞義……………文學博士 大野法道
（年頭所感）……………吉田絃二郎
その他眞野正順、佐藤賢順、藤田寛雅外數名

二色刷別表紙

年始用施本として好適（十二月二十日出來）三十部以上一割引、百部以上二割引

二十四頁

豫約締切十二月二十日

特價二十圓 送料二圓

石田一鼎 餞別狀 (二)

吉田 絃二郎

旅の朝々に心經を誦せよと説く一鼎の意は、我身、我心を去りて天の身、天の心に生きよといふにある。旅の一日、日々の生活悉く即天去私の一念に盡きる。

「天神地祇諸佛菩薩は我等が胸の内迄御照覽被成候間、少しも心中に物をかくし候事不相成候。日天の世界をてらし曇なきがごとくにて候。云々」

「人には本願と申事御坐候。天地の間に出来候物は皆天地の心から出来申候。子の身は親の身にて有之がごとくに而候。我身我心にて而無之物を、我身我心と存候而、私の分別仕候故、迷候て、天罰を蒙^{モウムリ}申候……我身我心にて無之時こそ天の身天の心にて候へ、天理の當然、忠孝の根本と申物也」

今日の時代のやうに一切を唯物論的に判断し、唯物論に立脚して行かうといふ考へ方とは天地の差がある。人間生活の本體を佛天に置き、人間の道德を天理の當然に置くのである。

「私の分別といふ物が諸惡の根本に而候。私の分別無之候はゞ一日も浮世をわたる事成間敷と存候は凡夫の心にて候。私の分別無之時、天理之當然あらはれ候て忠孝之道おこなはれ候。」

たとへば今度藩侯の伴をして江戸に下るに、朋輩の供衆の乗懸道具、鑓^{ヤリ}、はさみ箱などのきらびやかなるを見て羨む心の湧いて来るのも私の心のためである。馬に乗らないでは外聞が悪いだらう、徒歩で行かば笠、つば、わらぢがけが見苦しいであらう。足にまめができて難儀やせむなどと先き先きの取り越し苦勞をするのも私の心である。天の心は一切を天に委ねて、恐れず杞憂することなしである。

「天地は萬物を生ずるを以て心とす。主君は家中の者をはごくむ心、親は子をおもふ心、やめよと申候而もやめられぬが誠に候。」そこには義務もない、權利もない。人を愛すること、人に慈悲を垂るゝことのみにある。すなはち太陽の光りをめぐみ、草木萬物の光りに浴する大自然の姿である。これを天の心といふ。誠にいふ。

「私の分別をいかやうに仕候て戰治可仕哉と存候得ば……」

さて、この私の心にいかにして打ち克つことができるか、その方法として「先佛神えの誓願いたし候が始に而候。此故に今度も誓願被成候様にと申入候。世の諸佛發心の一落索は誓願に究り申候。少も私の分別にて無之候。」

私心を解脫し、天心に歸するの途として一鼎は佛神への誓願を第一に推奨してゐる。誓願こそ諸佛發心の究意と教へてゐる。誓願こそ、自己の心身を佛神の裡に歸一融合せしむる唯一つの道であつて、いさゝかも私心の存在をゆるさない。

「誓願いたし候てより、死したると慥に存はまり決定仕候へば私の分別はなくなり申候。」誓願は一身を抛つことでもある。一身を死すことである。昨日の偽我を殺して、今日の眞我に生きることである。はまりとは全力を盡すことである。覺悟を決めることである。人は大死一番して私心を去ることができる。しかし人間は悟つても悟つても迷ひはおこつて來る。その迷ひにはいかにして打ち克つことができるか？

「其上にても色々の分別差出候は、夢を見たるやうに存候而、打捨々々候へば、昨夜の夢を忘れたる様に成申候。幾度も夢と存候而、分別にかまひ不申候が修業にて候。此修業さへ心にかけて候て失脚不仕候へば修業する心ばかりに成申候。其時修業する心もなく成候て、子は親の心まかせ、内の者は主人の心にまかせ、無分別に成申候。」

私心は後から後から湧く。それを夢と観じて打ち棄つるがよい。夢にこだはつてはならぬ。それが修業である。かくて修業を積みめば修業する心もなくて天の心に協ふ身となる。道德なきところに究竟の道德が生まれる。

つぎにかれは生死について説く。

「根本に生死といふ事は無之物に候。生たりとおもひ、死たりとおもふ分別の上に生死は有之、生て居るとおもふ執心やめがたき故に死了たるとおもふ修業はさせ申候。」

本來生死なし。生あり、死ありと思ふは小主觀の上に在る。我が分別の執心の上にある。執心を捨つれば生なし、死なし。いつも死了せりと決心することが修業である。

「私の分別さへ無之候へば生死の沙汰入不申候。生を執する故に命をながく持度存候。死を執する故に死をいやに存候。又は何事もいらぬなど、取違申候。生死は分別の上に有之、根本には生死の沙汰無之と明め候へば私の分別も又なく成申候。」

私心を去れば生死なし。生に執してはならぬ。同様に死に執してもならぬ。死を恐るゝ者は世を捨て何もいらぬなどといふ。これもあまりに死に執するものゝ誤謬である。生も感謝すべし。死も感謝すべし。要は私の分別を棄てゝ、天の心裡に生死一切を委ぬべきである。

「無分別にして孝を致し、忠を致す。是を大忠大孝と申候。無分別の修業を今度の打立にてふつと思立可被成候。」

すべての道德は天心によりて行はるゝ時大道德となる。

「天命といふ物は凡夫の心にはかられぬ物にて候。……我身我心と思はず無分別に成候修業さへ仕候へば天命は明かにしれ申事(に)候。」

愚痴のともがら、一文不知の愚に歸る時天命を觀ずることはできる。

來月號より

信仰問答

開設

明るくひろく心の窓を開きたい
日常生活の心裡に去來する思想の
宗教の、信仰の問題を、私たちは
互に質し、共に語ることによつて
なやみを分かち、よろこびを共にし
てゆきたい。

ことさらな改まつての相談事で
なく、氣樂に、平明に信仰の光に
浴してゆくために、本誌の一異彩
となつていた信仰相談の頁を近く
新しい形で設けることにした。

讀者の方々がこの頁を、充分に
活用して下さつて、遠慮なく質問
を寄せて頂きたい。おそして、ひ
ろく開かれた心の窓から、明るい
信仰の光が、ふかくさし込んでゆ
くことを望みます。

芝園だより

○まづ朗報「浄土」は再生した。

編集部の郵便函には連日、振替通
知か新規申込か必らず配達され
て来る。これが「浄土」再生の活
力素となる。御禮言上。

○だが、正直にいつて、これまで
は苦しかつた。本年九月引繼いだ
時は五ヶ月も雑誌は不発行。用紙
配給停止、「第三種」認可取消しの
一歩前、經濟状態は底をついてゐ
た。白狀すれば、これから一體ど
うやつたらいいんだらうと一同手
を拱ねいであめ息をついたもので
あつた。それをとに角ここ迄押し
切つて来ることの出来たのは、吾
々の背後に讀者の熱烈なる支持が
あつたからだ。

○本來なら一日も早く遅刊をとり
かえし、増頁、別表紙を實現すべ
きだが、回生したとはいへ、いま
だその痛手癒えず、という状態。
もうしばらく御しんばお下さい。

○本誌には史料編さん官で、歴史
小説に異彩を放つ高柳先生の玉稿
がいたゞけた。吉田先生の石田一
鼎、まことに滋味ある教訓。佐藤
先生には引續いて御登場を願ひし
た。

○新年號は廣告通り、内容・體裁
共にベストをつくしたものと自負
し、正月の施本として御寺院方の
御利用も期待してゐる。豫約制に
して、申込數に應じて増刷するつ
もり故、十二月二十日までに御豫
約下さい。

○本誌の好評に比例して、「佛教論
叢」の申込みもますます増加。遅
れてゐる點は幾重にもお詫びして
年内には是非御手もとに届くよ
う、一生懸命努力致しておりま
す。

○したいこととは澤山ある。丁
度今の日本のように、しなければ
ならぬことの連續。齒をくいしば
つて、汗をかくて頑張ります。皆
さんもおか御聲援下さい。明日
の「浄土」のために。(竹中)

「浄土」十一月號

昭和廿三年十月二十日印刷
昭和廿三年十一月一日發行

(定價拾圓)

東京都港區芝公園五號地十番

編集兼 眞野 正 順
發行人

東京都千代田區錦保町三ノ二

印刷人 春山 治部左衛門

東京都千代田區錦保町三ノ二

印刷所 共立社印刷所

配給元

東京都千代田區淡路町二ノ九

日本出版配給株式會社

東京都港區芝公園五號地十番

發行所 法然上人鑽仰會

振替東京八二一八七番

會員番號B一〇八〇一四

會費 金 百四十四圓
一ヶ年 (送料を含む)

定價金 拾圓 (送料)